

—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

アルジェリア、リビア：イスラーム的マグリブのアル=カーイダがリビア情勢について声明を
発表

リビアでは統治機構が混乱し2つの「政府」が並立している。そのような中、5月下旬よりベンガジを中心にハリーフア・ハフタル将軍が率いる軍事組織による「イスラーム過激派」の掃討作戦が行われ、治安情勢も混迷を極めている。この情勢について、イスラーム的マグリブのアル=カーイダが5月27日付の声明を発表した。同派については、「アラブの春」以降のマグリブ、サハラ諸国の政治的混乱の中、勢力が拡大しているとの観測がある。声明の要旨とこれについての考察は以下の通り。

声明要旨

* シオニズム・十字軍の魔手が再びムスリムの国々に伸びており、今度はリビアの番である。
(エジプトでの) スィー・スィー大統領当選にあわせ、スィー・スィーと不信仰の筆頭であるアメリカからの援助、湾岸の陰謀諸国（特にサウジとUAE）からの資金、そしてアルジェリアの背教傀儡政府の明確な関与を受け、裏切り者であるハリーフア・ハフタル将軍がテロとの戦いを口実にイスラームとの戦争を呼びかけた。これは、リビア人自身の活動を装って十字軍計画を円滑化するためのものである。世界は裏切り者の成功を待っており、これはアルジェリアの将軍共、エジプトやシリアの虐殺者（によるジハード諸派を弾圧）に期待していることと同じである。

* ムスリムのウンマ全体、特にリビアの民に以下を呼びかける。

1. ハフタルによる攻撃は、実はシャリーア統治を生き埋めにして不信仰の方法論を強制するための十字軍の陰謀である。
2. リビアの民はシャリーアと尊厳の擁護とハフタル将軍やカッザーフィー残党のような不信仰傀儡の根絶のため、急ぎ団結せよ。
3. リビアの民や諸部族に、ハフタルやその仲間と絶縁するよう呼びかける。
4. リビアの同胞たちに、あらゆる相違を根絶して一心同体のごとくなるよう呼びかける。
5. リビアのウンマに対し、外国によるあらゆる内政干渉を拒絶するよう呼びかける。外国による干渉の筆頭はフランスとアメリカによる干渉である。
6. イスラーム的マグリブの民に、地域を再占領するためのユダヤ・キリスト教の陰謀に警戒するよう呼びかける。ムスリムのウンマに対し、ユダヤとキリスト教徒の同盟者たる地域における背教統治者共と絶縁するよう呼びかける。ムジャーヒドゥーンを支援するよう呼びかける。

考察

今般の声明は、ベンガジなどでのハフタル将軍派の軍事行動を欧米諸国・湾岸諸国の後押し

を受けたイスラームに対する戦争と位置づけている。その一方で、イスラーム的マグリブのアル=カーイダ自身がこの軍事行動を理由にリビア内外で作戦を行うとの脅迫や扇動を含んでおらず、リビアやマグリブ諸国の民に向けて十字軍の陰謀に対抗することや団結を呼びかける内容にとどまっている。また、同派と関係が深いとの説があるアンサール・シャリーアをはじめ、リビアで活動するイスラーム過激派諸派についても団体名を挙げるなどの言及は一切ない。

イスラーム的マグリブのアル=カーイダがリビアについて声明などを発表することは、珍しいことである。また、内容面でも同派が自ら行動を起こすことを示唆する文言が含まれていない。ここから、イスラーム的マグリブのアル=カーイダによるリビアへの関心や、リビアで行動を起こす能力は、それほど高くないと推定される。今般の声明は、2012 年末にフランスがマリへの軍事介入を準備していた段階でイスラーム的マグリブのアル=カーイダが指導者による演説をはじめ、フランスやその同盟者に対する反撃の意志を明示していたことと対照的である。また、リビア自身についても、同国は過去数年シリアへの戦闘員の主要な送り出し国であり、リビアにおけるイスラーム過激派への支持や関心は、シリアに寄せられており、マグリブやサハラを活動地域とするイスラーム的マグリブのアル=カーイダには寄せられていないのが実情である。以上から、イスラーム的マグリブのアル=カーイダが最近のリビア情勢を口実としてマグリブの資源を自派にひきつけるための示威行動を起こす可能性に警戒が必要である。ただし、同派の勢力そのものは最近低落傾向にあるため、リビアでの政情と治安の混乱に乗じ、同派やその提携勢力がリビアに公然と進出したり、領域を占拠したりするなどの行動に出る可能性は低いと思われる。

(イスラーム過激派モニター班)